

共生・公正・創造



ユニオン・EYE

<http://www1a.biglobe.ne.jp/jrtu-EWU>

ジェイアール東日本労働組合
〒108-0014 東京都港区芝5丁目33番36号
TEL(NTT)03-3453-2107 (JR)057-2290
発行者/今井 伸 編集者/平 憲治

“テロリストに乗っ取られたJR東日本の真実特別版”

『月刊現代 - 私はなぜ「タブー」に挑んだのか - 』

第2回

『週刊現代』に続き『月刊現代』もJR東日本の革マル浸透問題を告発した。本紙は筆者の了解を得て、驚くべきこの事実をシリーズで紹介することとした。

「職場秩序の崩壊」を生み出した元凶が、松崎明氏その人である。

一日約1600万人もの乗客が利用するJR東日本（東日本旅客鉄道株式会社。約6万5000人）。その社員の7割以上が加盟する最大・主要労組が、『JR東労組』（東日本旅客鉄道労働組合、約4万9000人）だ。このJR東労組と上部団体である『JR総連』（全日本鉄道労働組合総連合会、約7万人）に革マル派という特定の思想集団が浸透し、労働組合を支配。さらにはJR東日本の経営にまで介入しているという現実を批判しているのである。ましてや、非合法集団が支配している労働組合が、「究極の安全」が求められる「世界最大級の公共交通機関」の最大・主要労組だとしたら到底、看過できるものではない。

この革マル派に支配されたJR東労組とJR東日本経営陣との癒着は、「JR東労組（組合員）にあらざれば、人（社員）にあらざ」という悪しき“風潮”を生み出し、それはJR東日本発足から20年で、もはや“企業風土”となってしまった。そして、その企業風土は、乗客の安全や生命さえ、絶えず脅かしかねない危険性を孕んできた。

JR東日本では20年間、JR東労組の方針に従わなかった社員が、同じ組合員から集団で取り囲まれ、吊るし上げられるという陰惨ないじめが日常的に行われてきた。現在もJR東日本に勤務する社員（49歳）は運転士時代の99年、JR東労組以外の組合に所属する友人とハイキングに参加しただけで、JR東労組から「組織破壊者」のレッテルを貼られ、1カ月にわたって集団で吊るし上げられ、組合脱退に追い込まれた。そして脱退後、彼が対立労組に所属するに至って、JR東労組のいじめはエスカレートしていった。彼にミス誘発させ、退職に追い込むため、彼の乗務中に、JR東労組組合員が運転席の後ろに張り付きプレッシャーをかけたり、対向電車からパッシング。果ては信号を隠すなど、無法の限りを尽くした。しかも、これら「往来危険」（刑法125条）に相当する行為に手を染めてきた組合員のほとんどが現役運転士で、現場の管理者も「組合怖さ」に見て見ぬふりを決め込んでいたのだ。

そしてこれら乗客の安全や生命までも脅かす「職場秩序の崩壊」を生み出した元凶が、JR東労組とJR総連の絶対権力者で、今なお「革マル派最高幹部」といわれる松崎明氏（71歳、以下敬称略）その人である。この松崎という人物の“素性”については後に詳しく述べるとして、私が冒頭に、このJR革マル派問題の検証を「改めて」と書いたのは、この問題に真正面から取り組んだメディアは『週刊現代』が初めてではないからだ。